

「川のあるまち」第28号

新川と岩槻古道 —— 新川は古綾瀬川だった ——

加藤幸一

(1) 新川は古綾瀬川

綾瀬川の北側に綾瀬川と並行して見られる道が県道蒲生岩槻線で、この道に沿って流れている川が「新川」である。「新川」は、江戸時代は「古綾瀬川」とも呼ばれていた。元の綾瀬川という意味で、かつては綾瀬川の本流であったと思われる。「新川」は、当ても旧越巻村(現、新川町)、旧七左衛門村(現、七左町)、旧大間野村(現、大間野町)と流れ、綾瀬川に注いでいた。

「新川」は、江戸時代には「古綾瀬川」と呼ばれていたことが、長島村の名主であった内山家の古文書の解説を進めている中で判明した。さらに、現在の綾瀬川は、古綾瀬川に対して「新綾瀬川」とも呼ばれたこともわかった。

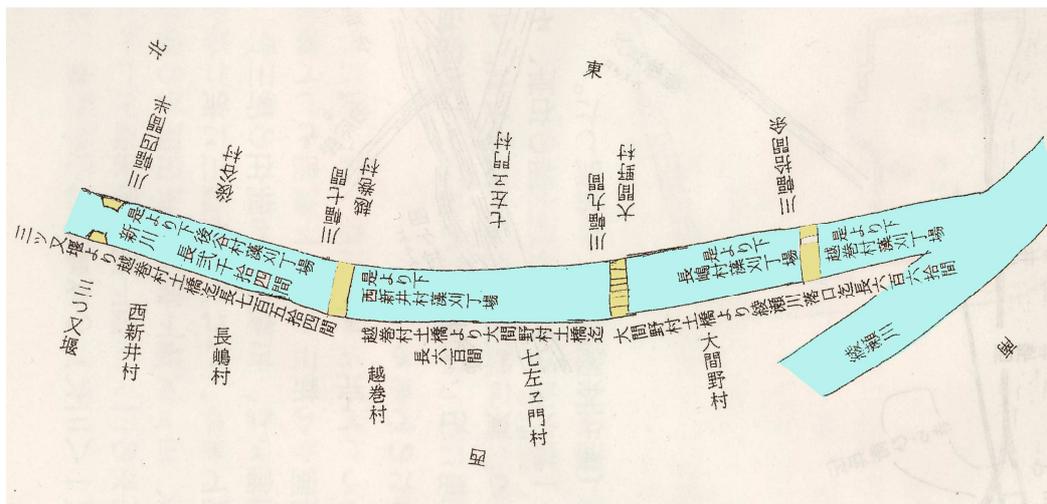
宝暦十一年(一七六一)の長島村内山家所蔵の新川筋絵地図(図1)によると、新川は、現在の県民健康福祉村の北隣にある三ツ又堰より、この新川が綾瀬川に注ぐ綾瀬川の落とし口までを指している。川幅は、三ツ又堰付近では四間半、越巻村土橋では七間、大間野村土橋では、三ツ又堰付近の川幅の倍の九間となっている。当時の新川は下流へ行けば行くほど広がっていたこともわかった。

なお、三ツ又堰は、末田用水が出羽堀と悪水落し(現在の新川)とに分かれる所であり、堰が三ツ又になっているためこういう呼ばれた。古くから移動することなく、同じ場所にある。

この絵地図によって新川が江戸中期の宝暦十一年には既に完

成していたことがわかる。その当時の新川の様子を伝える貴重な資料といえる。新川は、実は二五〇年以上前に付けられた古い名称だったのである。

図1 宝暦11年(1761)の新川筋絵図面(長島村内山家所蔵)



(2) 長島村の五才堀付近の古道

内山家は、長島村の名主を代々勤めた家柄である。天保七年（一八三六）の長島村内山家所蔵の五才堀筋付近の絵地図（図2）の中で、「寺」は「萬蔵寺」、神社の記号は「稻荷神社」、寺の東隣の建物は内山家である。格式ある内山家の周囲には囲い堀が見られる。

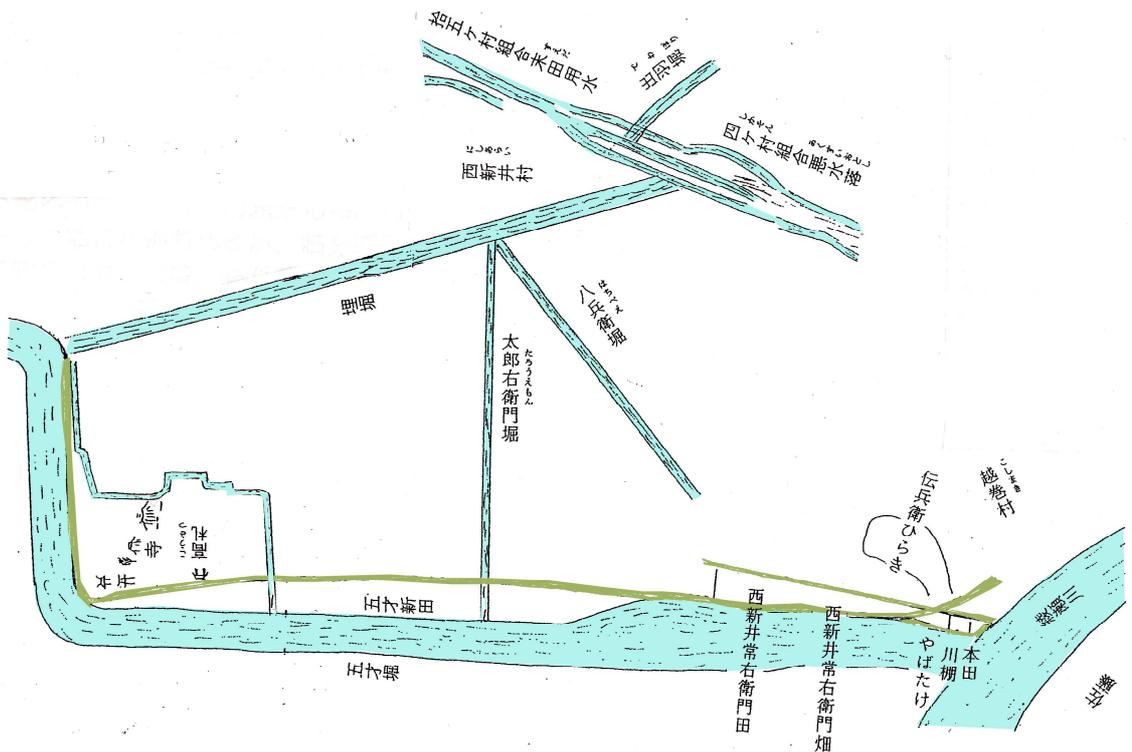
太郎右衛門堀の「太郎右衛門」は、長島村の内山家をさす。内山家の屋号は「太郎右衛門さま」である。

末田用水の三ツ又堰の下流は悪水落しとなっている。このことから、三ツ又堰より下流は、末田用水の悪水落しとし、つまり排水路であり、これが古綾瀬川に流れ込み、新川の上流部として整備され、古綾瀬川も現在の新川町二の四〇〇の島村家の東側から新川の中・下流部として整備されたものと思われる。こうして完成された新川は、主に排水路として利用されてきたのである。

地図中の五才堀筋に沿って見られる道は、「岩槻道」と呼ばれる古道である。東は新川筋に沿って伸びている。さらにその先は、現在の槍先（やりちやき）通り、旧出羽堀の右岸、そして蒲生橋で日光街道（現在の蒲生茶屋通り）へと合流した。

内山家のそばに、昔の名残が現在にまで残る岩槻道がある。内山家の西隣には五才堀に架かる大堰橋があり、その大堰橋より五才堀筋に沿って北に伸びる農道が岩槻道である。江戸時代の名残を残す古道として、後世に残したいものである（写真1）。

図2 天保7年の長島村絵地図（長島村内山家文書より）



(3) 七左衛門村の新川付近

かつての綾瀬川本流である古綾瀬川は、五才堀が綾瀬川に注ぐあたりから、現在の新川町二の四三三の斉藤家北側及び、二の四〇〇の島村家北側を通じて（現在、この区間の川は埋められており、川の名残は全くない）、今の新川筋へと流れていた。現在もその綾瀬川が新川に流れ込んでいたとの言い伝えが残っている。新川町（旧・越巻村）の地名はこの新川から採用したものである。

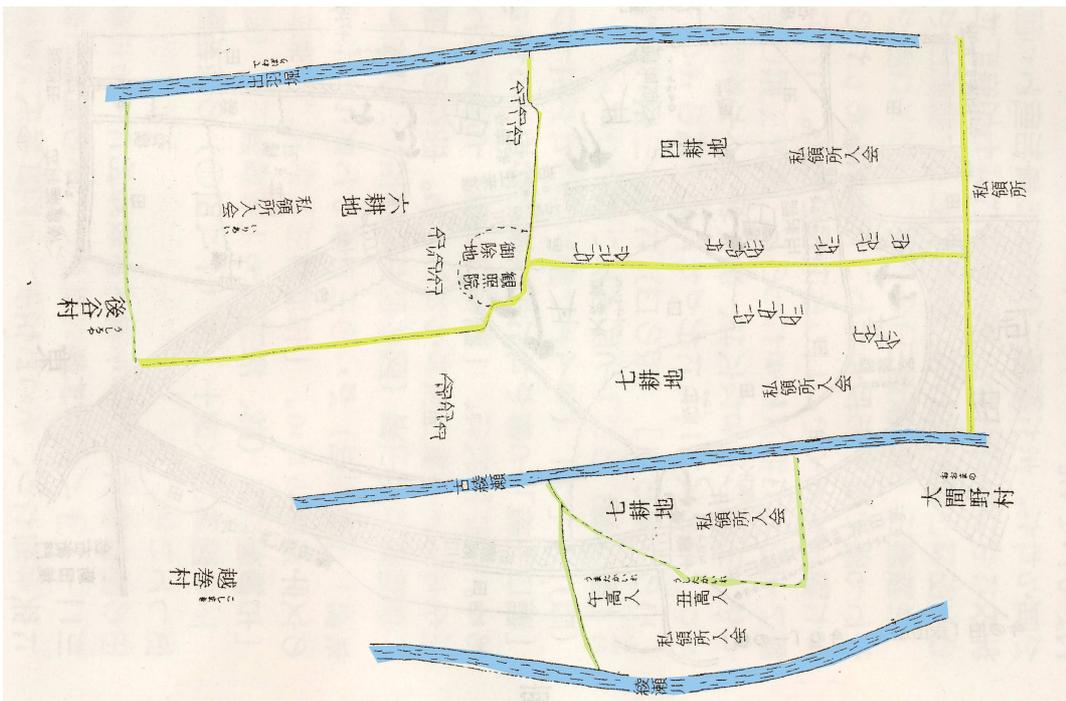
慶応三年（一八六七）の七左衛門村井出家所蔵の七左衛門村付近の新川の絵地図（図3）によると、この中に「古綾瀬川」と書かれた川がある。現在の新川である。出羽堀は古くからあり、現在の県民福祉村の北側にある三ツ又堰から東流してきた。出羽堀は、江戸時代初期に越ヶ谷領を開発した会田出羽家（現在の御殿町にあった）の名前からきていると推定されている。「新編武蔵風土記稿」という江戸時代の江戸幕府が編さんした本には、越ヶ谷宿の項目の中で、「会田出羽介正之（まさゆき）がこの地（越ヶ谷宿の御殿町あたり）に住んで、堀を開き、その堀を『出羽堀』と唱えた」とある。

江戸時代は、新川（古綾瀬川）の左岸（北側）に沿って岩槻道があった。岩槻道は、新川（古綾瀬川）に沿って北西方向に直進し、新綾瀬川に突き当たる。次に綾瀬川に流入している五才堀の左岸に沿って北に進み、長島村の名主内山家のそばの大堰を通じて現在の五才川橋交差点に向かった。この古道は地元では「往還」とも呼ばれていた。

また、絵地図の中央には観照院がある。この観照院から上（北

東）方向の道は、現在の出羽小学校に通じている。向かって右（南東）方向の道は、赤山街道に突き当たる道である。その合流地点は、現在の赤山道と国道4号バイパスの交差点あたりである。

図3 慶応3年の七左衛門村絵地図（七左衛門村井出家文書より）



(4) 大間野村の新川と綾瀬川付近

天保十一年(一八四〇)の大間野村中村家所蔵の大間野村付近の綾瀬川筋の絵地図(図4)には、「古綾瀬川」(現新川)と「新綾瀬川」(現綾瀬川)の文字が書かれ、「古綾瀬川」に沿って、「岩附(岩槻) 往来道」(岩槻道)と記載されている。

岩槻道と赤山道(図の向かって左)が交差する地点に新川を跨ぐ土橋が架けられている。現在の「辰の口橋」である。

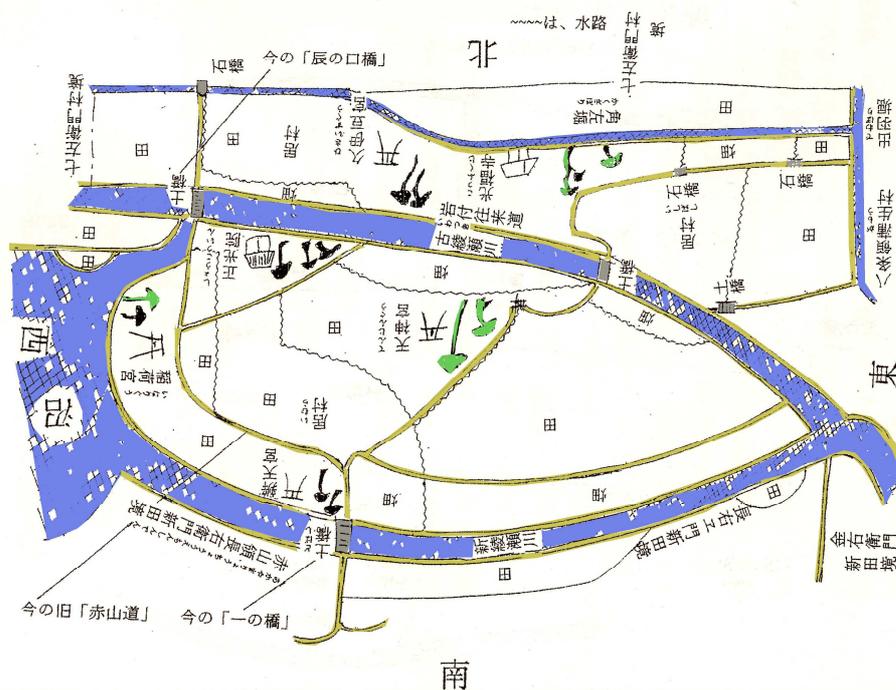
この「辰(竜)の口」には二つの伝説がある。一つは、赤山街道沿いの水路の水を新川の下をくぐって対岸に流すために作った穴に、水路の水が吸い込まれるように激しく落ち込んでいて、それが辰(竜)の口のようにだったと言われる。もう一つは、川底の下をくぐっている大きな穴は、竜が川底の地中から、激しく水を巻き上げ、空に舞い上がったときにくぐってできた跡であるという言い伝えである。

耕地整理が行われる昭和三十年代初頭までは、北から流れてきた赤山街道沿いの水路が、新川の川底の下をくぐるように流されて(伏せ越し)いたが、新川の水面は、赤山街道沿いの水路の水面よりかなり低かったため、渦を巻くように激しく流れ込んでいたのである。そして新川の下をくぐり抜けた水は、対岸の高い土手道となっていた赤山街道の西側の地点から噴き出すようにして出て、「生け簀」に流れ込み、その水は、すぐそばの「大沼」に落とされたり、赤山街道を越えて、赤山街道の東側の、現在の大間野町四丁目や五丁目に用水として流されたりしていた。

「新綾瀬川」(現綾瀬川)の上流には「大沼」と呼ばれる今で

は考えられない広大な沼があった。この大沼は、越谷側では、現在の新一ノ橋周辺から武蔵野中学校にかけて広がり、七左衛門村の大沼神明(兵「ものゝ」神社)がその大沼に面してあった。また綾瀬川の対岸の草加方面へも、この大沼が同様に大きく広がっていた(図4)。

図4 天保11年の大間野村絵地図(大間野村中村家文書より)



一ノ橋(図5の新綾瀬川に架かる土橋)は、江戸時代は「一の網(あじ)土橋」と呼んでいた。これがいつの日か「一ノ橋」と呼ばれるようになったと思われる。

「あじ」とは、地元の方言「あじあみ」のことかもしれない。「あじ網」とは、「越ヶ谷言葉 方言と訛集 改補編」(越谷市郷土研究会理事 山崎善司著)によると、川を仕切り船に取り付けた大網で、上り魚を捕る漁法であるという。

角左(かくざ)堀は、大間野小学校の北側を流れる現在の排水路筋である。

図4で、久伊豆神社の現在地は、光福寺の裏の大間野町二の二〇〇のかつての太田家の跡地(現在、「パルコート越谷」のマンション)あたりである。稻荷神社は、大間野町四の一五二の二の町田家である。弁天社は、大間野町五の二三五の金子家である。以上の三社は、慶応四年(一八六八)に天神宮の地に合祀されて「三社神社」として今日に至っている。

なお、現在の綾瀬川は、桶川市小針領家の備前堤に源を発し、葛飾区の中川に架かる上平井橋南側で合流する全長約三十九キロメートルの中川水系に属する川である。

しかし、かつての綾瀬川は、足立郡と埼玉郡の郡境を流れ、近世初頭まで荒川の主流であったのである。

写真1

昔の岩槻道の名残が今も見られる農道(内山家そば)

<北方向を見る>



現在は、かつての岩槻道と打って変わって、人影が全くみられない寂しい道となっている。

向かって左端は大堰橋、向かって右方、写真枠の外に内山家がある。

図5 綾瀬川筋の絵図面(一部)
(長島村内山家所蔵)



新川（古綾瀬川）と岩槻道の地図

越谷市南部の略地図



写真2

三ツ又堰（健康福祉村の北側）

<南方向を見る>

- ・末田用水は、三ツ又堰（県民健康福祉村の北隣）から、新川と出羽堀に分かれる。→写真2
- ・現在の県道蒲生岩槻線に沿って流れる新川は、江戸時代は「古綾瀬川」とも呼び、現在の綾瀬川は、「新綾瀬川」とも呼ばれた。
- ・古綾瀬川（新川）の左岸（北側）に沿って岩槻道と呼ばれた古道があった。
- ・長島の内山家そばの五才堀の左岸にある農道は、昔の岩槻道の名残である。